

新美南吉記念館だより

NIIMI NANKICHI MEMORIAL MUSEUM NEWS

発行 新美南吉記念館 〒475・0966 愛知県半田市岩滑西町1・10・1 Tel. 0569・26・4888 <http://www.nankichi.gr.jp>



三月十四日(日)、 第三十二回新美南 吉童話賞表彰式を 行いました。今年も新型コロナウイルスへの警戒で、

受賞者は最優秀賞の河合南
美さんとオマージュ部門大
賞の久守芽里依さんのみに
ご出席いただきました。日
程も愛知県に発令された緊
急事態宣言の延長を受け、
当初の二月二十日(土)か
ら延期しました。

式ではまず半田市教育長
が挨拶をし、受賞者のお二
人へ賞状と副賞をお渡しし
ました(写真①)。それか
ら審査員である児童文学作
家の山本悦子先生が登壇さ
れ、今回の童話賞への総評
として、河合さんの「北風
のおくりもの」は読む人の
気持ちを優しくする作品で
あることや、久守さんの
「マーガレット」は素敵な
花言葉を持つマーガレット
を中心に過去と今を描く構
成が良かったことなどを話
されました。また結びとし
て、「二人とも書き手とし
て未来があります。ぜひこ
れからも書き続けてくださ
い」と激励の言葉も贈られ
ました。

受賞者のスピーチでは、
まず河合さんが作品を書い
たきっかけを披露されまし
た(写真②)。昨年、南吉
の「でんでんむしのかなし
み」と出会い、童話賞の募
集をしていることを知り、
自分も子どもたちが安心し
て寝られるようなものを書
いてみたいと思われたの
だそうです。続く久守さん
は、夏休みの間に何パター
ンもお話を考えていたこと
や、受賞のお祝いに新しく
パソコンを買ってもらった
ので、早速それで新しい作
品を書いていることなどを
話してくださいました。

それから受賞作の朗読へ
と移り、「きりんの会」の
鈴木絹絵さんが「北風のお
くりもの」を、「南吉童話
お話の会 でんでんむし」
の館山典昭さんが「マーガ
レット」を朗読されました。
出席された方々は、今回の
入選作品集『赤いろうそく』
を片手に、その朗読に耳を
傾けていました。

最後は記念撮影でパシャ
リ(写真③)。今年度は募
集から表彰まで、全てコロ
ナ禍の影響を受ける波乱の
回であったと思います。

受賞者へのインタビュー

自由創作部門最優秀賞を受賞された、河合南美さんにお話を伺いました。



—受賞の連絡を受けた時、どう思われました？

童話賞に応募した事が初めてでしたので、信じられなくてスマホから聞こえてくる音声を必死に聞き取っていた気がします。

—普段からお話を書かれていますか？

五歳の息子がいるので絵本や童話に触れる機会が多いですし、毎日『365のみじかいお話』という本を読み聞かせていますが、これまでお話を書いてみようと思うことはありませんでした。ですが昨年は家で過ごすことが多くなり、先の本で南吉さんの「でんでんむしのかなしみ」と出会いました。お話の中のでんでんむしと、不安にささくれ

だつていた自分の姿が重なり、新美南吉童話賞の募集をしていることも知って、眠れない夜を過ごしている子どもたちに寄り添えるようなお話を自分でも書きたいと思いました。そうして初めて書いたのが今回の作品です。

—このお話はどのように思いつかれたのでしょうか。

息子と一緒に寝ていると、突然泣きながら目を覚まして「母さん死んじゃうの？」とか「怖い夢を見たんだ」と言うことが何度かあって、ただ「大丈夫」という言葉だけじゃなく、不安を和らげるような希望が持てるお話があったらいいなと思い、冬眠前のくまの子が主役の話を思いつきました。

—ではくまの子のモデルは息子さんなんですね。

そうですね。最後に出てくるピクニックとお団子にワクワクする姿は息子そのものです。大人は冬の次は春が来ることを経験で知っています。小きくくまの子にとっては不安だらけですよ。新しい生活様式を

求められている子どもたちも同じで、その不安に親として寄り添い、離れていても大切に思ってくれている人の存在を伝えるため、問題を一つ一つ、一緒に乗り越えるお話にしました。

—今後も創作は続けていきますか？

北風の次に考えたのがドタバタするようなお話で、子どもに聞いてみると「あ、じゃあこうしたら？」とどんどんお話が広がっていつか、作っていてとても面白かった。これからも続けていきたいですね。

*

オマージュ部門大賞を受賞された、久守芽里依さんにお話を伺いました。



—受賞の連絡を受けた時、どう思われましたか？

参加賞で消しゴムをもらって満足してたので、連絡を受けた時はただ驚

きました。

—お話を書くようになったのはいつからですか？

詳しくは覚えてないけど、小さい頃からノートに書いたり、口に出したりしてました。アイデアを書いてからノートに絵を描いてお話を作ることもあるし、もう思いついたまま独り言で話したり……。

—今回、どうしてオマージュ作品に「手袋を買いに」を選ばれたのですか？

最初は「ごんぎつね」と「手袋を買いに」で迷って、「ごんぎつね」だと最後にごんが死んじゃうので、「手袋を買いに」にしました。本があつてよく知っていますし。あとはやっぱり南吉童話賞だから、南吉の賞、オマージュ部門の方がいいかなと。小学二年生の時にも「手袋を買いに」で応募してるんですけど、その時は残りませんでした。

—今まで登場人物が亡くなるお話を書いたことは？

「マーガレット」を書いた後、パソコンで書いていたのは、主人公が不幸になつて死んじゃうような話

もあります。

—「マーガレット」を書く時に工夫したことや苦労したことはありますか？

物語にぴったりの花言葉の花図鑑で調べたことです。初めはヒナギクだったんですけど、物語に合うマーガレットにして、マーガレットがその時代にあるかも調べました。マーガレットの花言葉は「信頼」と「秘められた愛」で、「秘められた愛」はみさえさんのお祖父さんとお祖母さんの関係を意味して、「信頼」は狐が人間を信頼するようにと考えました。

—これから「こんなお話を書いてみたい」というものがあれば教えてください。

今もいろいろ書いてみるんですけど、最初は明るい話にしようと思っても、どうしてもだんだん良くない暗い話になつて、主人公が結局不幸になっちゃうんです。構想の段階では明るい話がいづくんだけど、いろいろ問題点が出て、主人公が闇に落ちてつちゃう。だから、もうちょっと明るい話を書きたいなと思います。

南吉とわたし ②② 絵本画家 しまだ・しほ



絵本は大人の本と違って文章が短い分、ひとつひとつの言葉に沢山の意図が込められています。謎解きゲームと絵との響きあいでは本全体の印象が変わるのは、制作中の醍醐味です。絵本『2ひきのかえる』でも取材先で多くの方に助けていただき、南吉作品の奥深さに触れました。

新美南吉は、人々の暮らしを見つめ続けた作家です。『2ひきのかえる』は「なぜ蛙が主人公？」の謎解きで始まりました。気になったのは「蛙と畑」「ゆきあう」「池」、最後に突然登場する「にんげん」という言葉でした。

南吉の故郷、知多半島は、昔、水に苦労したそうです。水がなければ生活できません。戦前、白米は貴重な現金収入で、得るには田んぼが必要でした。水も田んぼと同じだけ必要で、せき止めて独占したり、勝手に畔を壊したり、各地で頻繁に「水騒動」が起きていたといえます。

蛙といえば田んぼですが、なぜこのお話は「畑」が舞台なのでしょう。昔「畑」は、生活の場でした。蛇口を捻れば水が出る今と違い、当時は水を運ばなければならなかったため、人々は、池より低い土地は水を流せる田んぼに、田んぼほど水のいらぬ「畑」は池より上や家周囲に作り、主に「畑」から食糧を得ました。ニホンアマガエルは樹上性で「畑」にもいます。水量が収入格差に直結する生活と、水がないと死んでしまう蛙。南吉は「畑」を舞台に、人々がどれだけ水を求めていたか描こうとしていないのでしょうか。一説によると「ゆきあう」は「知った顔と出くわす」意味もあったそうです。となれば、言葉の向こうにご近所同士ひしめきあって生きる様子が透けて見えます。一見のんびり

した「水騒動」は、流血も辞さぬ命がけの闘いだったかもしれません。

でも南吉は、声高に正義を叫ぶのを好みませんでした。最後の頁で「にんげんでもかえるでも」と並べた南吉。主人公が蛙なので喧嘩も、どこかユーモラスに映ります。私は絵本の最初から、蛙と並行して「季節ごとの家族」を描き、最後に出た「にんげん」と同時に人物にも色をつけ、南吉の「命への平等なまなざし」が、違和感なく響くようにしました。

池を掃除する「池かいどり（池干し）」が、昔は家族の楽しい恒例行事という記事も見つけました。81か所もの池がある半田市では2007年から有脇地区5か所で再開されていますが、これは冬に晴れが多い地域の「昔ながらの知恵」。休田する冬の間、池も一緒に休ませ、天日干しで池表面を乾かすと、新しく水を引き入れた春先に池が濁らず澄んだまま保てるのだそうです。※半田市ホームページより

南吉は人は「皆究極に於てエゴイストである：こういう試練を経て来た後の愛はいかにこの世を住みよいものとするものであろう」と書いています。生きる上で簡単に譲れない価値観の違い。綺麗ごとでは片づかぬ衝突が生じて、夢物語と一蹴されても、一呼吸おくだけで心に花が咲き、笑顔が生まれる。善意が伝わらず殺されてしまう『ごんぎつね』に対し、哀しみを含まない『2ひきのかえる』は、とても「未来的」です。狭くなった地球で多様な価値観と日々折り合っていくかざるを得ない現代にこそ必要なお話かもしれません。「多文化共生は大げさなものではない」と南吉が語りかけてくるようです。

執筆者プロフィール 1967年東京都生まれ。自作絵本『によき・によき』『ぽかぽか・いいひ』、共著に『ひとつのねがい』などがある。2019年、『2ひきのかえる』を出版。

著作紹介 / 『2ひきのかえる』（理論社）作：新美南吉 絵：しまだ・しほ

コミカルに描かれたカエル同士の喧嘩とともに、春へ移ろいゆく美しい田園風景と生命の営みが目を引きまします。南吉が描いたこの平和へのメッセージは、しまださんの呼びかけに応じて、イタリア語・シンハラ語・スペイン語・トルコ語・ネパール語・フィンランド語・フランス語・ベトナム語・英語・中国語の10カ国語に訳されました。



南吉のふるさとで活動、松本さんご夫妻に聞く

新美南吉の生家はほぼ年中無休で誰でも見学することができですが、その生家を公開以来三十四年にわたって管理されてきたのが、松本勉さん(79)、美穂子さん(77)ご夫妻です。今回、昔から生家の前に住まわれているお二人に、生家のことや、南吉のふるさと岩滑での美化活動についてお話を伺いました。

美穂子さんのお父様、石垣藤九郎さんは南吉より四



歳年下で、南吉の日記にも名前が出てきます。若い頃、南吉から鼻をつまんだような声で「藤九郎君、明日名古屋へ行こう」と誘われたこともあったのだとか。残念ながら行けなかったそうですが、蓄膿症だったという南吉らしいエピソードです。お母様の秀子さんは、南吉が亡くなる三か月前に安城から嫁いで来られました。そのため、南吉の継母志んが大きなマスクをつけておかもちに食事を載せ、離れて臥せる南吉の元へ通うところを見たことがあるそうです。美穂子さん自身も幼い頃に、畳屋を営んでいた南吉の父多蔵が、畳の仕上げに包丁で藁を勢よく切っていたのを覚えていると話してくださいました。

勉さんは関西の生まれで、岩滑に

越して昭和四十六年に美穂子さんと結婚されるまで、南吉のことはまったく知らなかったそうです。それが結婚から二か月して、南吉顕彰のために藤九郎さんが市議選に立候補するのを手伝うことになり、南吉漬の生活が始まりました。明けても暮れても南吉南吉で、それからは南吉のことがよく分かったそうです。

南吉の生家は一時荒れていましたが、市議になった藤九郎さんの尽力もあり、昭和六十二年に半田市が再建をして公開しました。その管理は藤九郎さんに任せられました。初めからほとんど勉さんが管理されてきたそうです。毎日生家の開け閉めをし、一応の時間は決めてあるものの、お客さんがいれば早くに開け、遅く閉められることもありま

す。「遠くから見えたんだっ

たら、閉まっ」と、もういっぺん来なさいかんでしょ」と語る勉さん。時折お客さんに、生家が表から



見ると一階建てでも、裏から見ると二階建てであることや、街道が交差する場所にあり往時は人の行き来が盛んだったことを説明すると、珍しがってくれるのだと教えてくださいました。

そんな松本さんご夫妻は生家の管理以外にも、岩滑の裏を流れる矢勝川沿いのサイクリングロードで、堤や花壇の手入れに勤まっています。このサイクリングロードが出来たのは平成十四年のこと。当初は綺麗なキリシマツツジが咲き揃い、奥までずっと続いていたのですが、水不足や土手から上がつてくる蔓に巻かれて、三年でほとんど枯れてしまったのだとい

南吉先生の語り部、加藤千津子さん逝く

昨年十二月二十五日、安城高等女学校で新美南吉の担任学級の生徒だった加藤千津子さん（旧姓山口・九十五歳）が亡くなられました。

南吉の教え子たちは、これまで幾度も座談会やテレビ取材などで貴重な証言をして南吉顕彰に努めてきました。その中でいつも中心的な立場におられたのが千津子さんです。

南吉の安城高女赴任七十年を記念して平成二十年に半田の雁宿ホールで座談会を開いた際は、先に鬼籍に入られた相澤さん、尾頭さん、山崎さん、竹内さんもまだお元気で、実に贅沢な顔ぶれでした。学芸員とし



て司会を担当していた私は、どなたに尋ねてもいいお話が頂ける安心感から、当日の流れを大雑把にしか決めていませんでしたが、千津子さんはそんな私に声をかけ、進行のリハーサルまで付き合ってくださいました。南吉を語り継ぐことに対する千津子さんの真剣さに触れ、己の甘さに恥じ入ったことを覚えています。（写真・座談会で語る千津子さん）

平成二十三年には、南吉の安城時代の日記二冊を当館に寄贈していただきました。南吉の死後、教え子たちが遺族から譲り受け、皆で回覧していたものを千津子さんが預かっていたのです。日記には校定全集で伏字にされたように作家らしい辛辣な観察眼で書かれた人物評が随所に見られます。日記は人間南吉を伝える宝物であると同時に、最初の全集出版時に「公開は何十年か早すぎた」と批判された危険物でもあります。そんな貴重で厄介なものを一人で守ってこられたのは気苦労の多かったことでしょう。寄贈後に見せた千津子さんの安堵したような表情が印象的でした。

千津子さんとの思い出は尽きませんが、千津子さんらしいと感じたのは、一番お好きな南吉作品が「鳥右エ門諸国をめぐる」だったことです。武士の鳥右エ門が己の罪を悔い、人のためになる生き方を探しながらもエゴを捨てきれず、最後には発狂してしまう話です。近代的な自我を児童文学に描いた問題作ですが、決して一般受けする作品ではありません。千津子さんはよく「先生にはこちらの気持を見透かされているような気がして、私は少し引いたところから見ている生徒でした」と語っていました。南吉を教師としてだけ見るのではない、人間の性を鋭く描く作家として、深く理解し、愛しておられた方だったと思います。

千津子さんの当館に対する数々のご支援に感謝申し上げますと共に、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

館長 遠山光嗣

南吉の詩がスローガンに

二月一日（月）～三月三十一日（日）まで、オンライン・アートプロジェクト「AICHI↑ONLINE」が開催され、ウェブ上で九つの作品が公開されました。これは新型コロナウイルスの流行により活動の機会をなくしたアーティストたちを支援するため、愛知県が主催したもので、そのスローガンに南吉の詩「明日」の一節が用いられました。

明日はみんなを待っている
泉のようにわいている
ランプのように点ってる

「AICHI↑ONLINE」のウェブサイトを訪れると、まずこの言葉に迎えられる。南吉が愛知県出身の作家であることに加え、この詩が「創造」への希望を託しているとして、スローガンに採用されたのです。その上で、コロナ禍の中にあって映画・現代美術・文学・音楽など幅広いジャンルを展開することで、「創

造」の灯火を絶やさず、明日へとつないでいくという意思を示しました。



©三重野能

同プロジェクトの参加作品の中には、南吉の短編小説「花を埋める」の読み切り漫画もありました。描いたのは南吉と同じ半田市出身の漫画家、三浦よし木さんです。少年のほろ苦い初恋をテーマにした原作を繊細なタッチで描き出し、期間好評を博しました。記念館では四月十七日（土）から、漫画「花を埋める」の原画展を開催し、作品に描かれた子どもの遊びや南吉の初恋について紹介する予定です。

記念館からのお知らせ



正八ちゃん端午の節句(5月4日、5日)
子どもの日は正八ちゃん(南吉の本名)になったつもりで
楽しもう! 今年は次のイベントを両日開催いたします。

竹とんぼおじさんが やってくる!

竹とんぼお
じさんが作っ
た竹とんぼを
もらって、飛
ばし方を教え
てもらおう。



時間 9時30分~17時
場所 記念館内
対象 中学生以下

三浦さんに似顔絵を描いて
もらおう!

時間 ①10時~12時
②13時~15時

場所 記念館芝生広場

対象 小学生以下

(保護者同伴)

定員 各日40名

※①②とも開始から30分ご
と、各回5名までとします。

①は9時30分から、②は12
時30分から整理券を配布
し、参加時間が選べます。

ごんぐくんの謎解き

クイズラリー

クイズに答えてプレゼン
トをもらっちゃおう!(各
日先着100名まで)

ギャラリートーク

三浦さんが企画展会場で
漫画「花をうめる」にまつ
わる話をされます。

日時 ①10時30分~
②13時30分~

場所 記念館展示室



三浦よし木さん
が来館し
て似顔絵
を描いてくれます。

時間 ①11時~12時
②14時~15時

場所 記念館工作室

※各回開始1時間前から整
理券を配布(各10名程度)。



©三浦よし木

※常設展観覧料(高校生以
上220円)で観覧できます。

※各回20分程度・予約不
要。高校生以上は展示観覧
料(220円)が必要です。

*三浦よし木

漫画「花をうめる」原画展

―作品に描かれた遊びと恋―

漫画家・三浦よし木さん
が新美南吉の短編小説「花
を埋める」を漫画化されま
した。漫画の原画や、作品
に描かれた子どもの遊び、
南吉の初恋などについて紹
介します。

期間 4月17日(土)
~7月4日(日)

場所 記念館展示室

冊子『阿久比の自然散歩』
を配布しています

記念館敷地内の「童話の
森」で自然観察路の管理を
されていた大橋秀夫さん
が、新たな自然観察帳を発
行されました。半田市の隣
、阿久比町の自然について
、南吉の作品や日記に出てく
るものという視点から解説
しています。この冊子(A
5判76頁)は大橋さんから
寄附していただきましたの
で、受付で無料配布してい
ます。(二人一冊)



日誌抄・

令和二年十二月(師走)

▼4日 記念館公式ツイッ
ターで南吉の豆知識を紹介
する「#南吉雑記帳」を開
始▼5・6日 「えと人形
をぬろう」。両日で48名参
加▼12日 南吉の物語と風
景をつなぐ観光PRキャン
ペーン「今こそ読みたい、

南吉の言葉。」第2弾始ま
る(3月31日)▼13日 ミュ
ージアムトーク。4名参加
▼20日 企画展「児童雑誌
『カシコイ小学生』に集つ
た作家と新美南吉」終了。
会期中観覧者数13656
人▼25日 南吉の教え子・
加藤千津子さん逝去▼26日
企画展「榊原澄香ペーパー
アート展」始まる(4月
11日)▼19~28日 『手袋
を買いに』の日。期間中
216名参加

令和三年一月(睦月)

▼27・29日(株)SUB
ARU半田工場へ出前授
業。両日で71名参加

令和三年二月(如月)

▼1日 信金中央金庫が半
田市に2000万円のふる
さと納税。うち1000万
円は「新美南吉生誕110
年記念事業」のため▼6日
中日新聞尾張版の「わが街
探偵団」で南吉の童話「一
枚の葉書」が取り上げられ

る▼11日 没後78年「貝殻
忌」へのメッセージ・イラ
スト等の募集を始める▼20
日 第32回

『赤いろう
そく』発売

『赤いろう
そく』発売

『赤いろう
そく』発売

